

潤光学園（1933～49）小史



本校の前身は1933年、久野タマ（1889～1985）が夫・譚雄（1878～1941）らの資金提供を受けて、北鎌倉に創設した潤光学園です。1936年10月、現校地の横浜市鶴見区生麦町に移転し、1939年には5年制の高等女学校として認可されました。

潤光学園は小規模の女学校でしたが、師範学校卒の教員中心ではなく、在野の各分野の専門家や才能豊かな教師たちが教壇に立つユニークな学園でした。亡命ロシア人で日本にバレエを広めた「日本バレエの母」エリアナ・バヴロバ（1897～1941）、妹のナデジダ（1905～82）、日本国紙幣の文字を揮毫した昭和初期を代表する書家・御手洗南溪（1877～1943）とその高弟・岡村天溪（1912～92）、黒田清輝に師事した東京美術学校（現・東京藝術大学）教授で文化功労者となる和田三造（1883～1967）、与謝野晶子に師事した歌人・桑野信子（1902～55）、蛾の研究で世界的に著名となる昆虫学者・井上寛

（1917～2008）、戦後日本史学会をリードした歴史学者・北山茂夫（1909～84）、有馬生馬・安井曾太郎らが創始した「一水会」に属した画家・久野昌康（1911～52）、のちに武蔵野音楽大学学長を務めたバイオリニスト・福井直弘（1912～81）など、その顔ぶれは先進的な教育にふさわしいものでした。また、当時の近代建築の粋を取り入れた、緑に囲まれた白い壁と赤い屋根の美しい校舎には、全国的にも極めて貴重なスタインウェイのグランドピアノが置かれていました。

戦時色が強まる中でも、自由主義的な気風を保ち、久野タマの方針もあり、外国人子弟を区別なく迎え入れ、英語を敵国語とする時勢に対して「相手をよく知ることが必要だ」として英語授業を存続させたといえます。

潤光学園は戦時中の相次ぐ空襲からも焼失を免れ、1947年、男女共学校として再出発します。しかし、創立者の久野家の私財に多くを依存していた学園の経営は困難となり、1949年9月、法政大学に経営移管されました。

半世紀後の1999年、本校校門脇の小さな庭に、潤光学園の歴史を顕彰する「潤光学園創成の地」の記念碑が建てられました。記念碑の横には、潤光時代から約90年間受け継がれてきた古い日時計があります。日時計は潤光学園、法政女子、法政国際の2万数千人の生徒たちを見守り、いまでも時を刻み続けています。



北鎌倉時代（1933～36）の潤光学園



生麦校地での運動会（1941年5月）



食堂とスタインウェイのピアノ（1940年頃）



中庭での集合写真と日時計（1944年3月）